The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | うたのなかの「神さま」：歌うこと、あるいは物語を見出すこと |
| Author(s) | 日高, 庭鳥 |
| Citation | 文化/批評. 2010, 2, p. 95-105 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/75760 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# うたのなかの「神さま」
## ――歌うこと、あるいは物語を見出すこと ――

日高庭鳥

## 音。そしてはじまり

姜信子の『日韓音楽ノート―<越境>する旅人の歌を追って―』を初めて読んだ時、鮮烈に心に残った言葉がある。

> 音楽とは、そうそう簡単に国境を越えません。すばらしい音楽であれば、国境など問題ではないというのは美しい嘘です[1]。

「音楽は国境を越える」とは、しばしば耳にするフレーズだ。だが、「音楽はそんなに簡単に国境を越えない」という言葉は、当時のわたしの胸に深く突き刺さってきた。それはまた、言葉に絶望して、音楽に希望を見出そうとしていた当時のわたしにとって、その希望を揺るがせるような、重みのある言葉だった。同書には、韓国籍を持ち、在日韓国人三世である著者が、1989年から韓国に暮らすようになった際、日本では演歌歌手として認識されているチョウ・ヨンピルが、韓国ではエレキギターをかき鳴らしながらロックを歌っていることを知って衝撃を受けたことが書かれている。「音楽は国境を越えるという美しい観念も、戦後の日韓のあいだでは先入観以上のなにものでもない。それを二つの顔をみごとに使いわけるチョウ・ヨンピルが、はからずも痛烈に教えてくれた。閉じたイメージの虜になっていることにも気づかずに、日本に流れこんでくる洋楽ばかりに耳を澄まし、開かれた世界に憧れて『音楽は国境を越える』などと無邪気に口にしていた自分自身の能天気ぶりに、わたしはつくづく呆れたのだった」[2]と姜は語っている。

だが、姜は、「音楽は国境を越えない」と言っているわけではない。彼女は、冒頭であげた文章のあとに続けてこうも言っている。

> 音楽が国境を越えるためには、その音と結びついたイメージなり、世界観なり、物語が必要なことに、わたしは気がつきました。音が絵をともなってたちあらわれるとき、人は国境の向こう側の音に耳をかたむけることができるのです[3]。

音は音だけで国境を越えるのではなく、その音が持つイメージや、世界観や、物語をともなって、初めて国境を越えるのだと姜は言う。音が国境を越えるとは、聴く者が、音の向こうに絵や、風景を見出すことでもある、と。

音の向こうに見出す絵、風景とは、なんだろうか。

聴く者が、その音の向こうに誰かを、あるいは誰かの生きる現実を、風景を、想像するとき、音は、初めて「わたし」と「あなた」の境界を越え、わたしのなかに流れてくる。

このことは、国境に限らず、宗教や、言語、性別など、さまざまな「境界」についても言えるのかもしれない。たとえば、外国語の歌を聴いた時、言葉の意味はわからなくても、何かが心に響いてくるときがある。言葉の意味はわからないのに、歌い手のエネルギーや感情が身体に直接伝わってきて、涙が出ることもある。

そのとき、音はたんなる音ではなく、おそらく物語をともなっているのだろう。

この文章は、わたしが出逢った音と、その音がともなっていた物語について綴った航海日誌である。

## 神さまからの贈り物

小さいころからピアノを習い、中学、高校と吹奏楽部でクラリネットを吹いてきたわたしが、大学に入って初めて出逢ったのが「ジャズ」という音楽だった。

なりゆきで入部した軽音楽部で、右も左もわからないまま、デューク・エリントン[(4)]というミュージシャンの音楽を演奏することになった。そこで出会った音楽は、それまで吹奏楽部で演奏してきた音楽と、楽譜の読み方、リズムがまったく違っていて[(5)]、新鮮だったが、難しく、わからないことだらけだった。和音の違いなのか、演奏法の違いなのか、あるいは録音状態の違いによるものなのかはわからなかったが、なにか、それまでに聴いてきた音楽にはなかった、混沌としてざわざわしたエネルギーをデューク・エリントンの音楽を聴いて感じたことを覚えている。

入部して半年後ぐらいから歌を歌い始め、以来これまで、14年ほど歌い続けているが、歌っていくうちに、ゴスペルや、ブルースなどの音楽にもすこしずつ触れるようになり、そこで、“Jesus”や”God”という、キリスト教の「神」と出逢った。

クリスチャンではない自分が、それらの歌を歌うことにどのような意味があるのか、ずっと悩んでいたが、どれだけ悩んでも、納得のいく答えを得ることはできなかった。それでも、それらの歌を歌う人々の歌声に憧れ、そんなふうに歌いたいと願った。

わたしがキリスト教と初めて出逢ったのは、小学校低学年のころである。当時、父の仕

事で沖縄に住んでいたのだが、米軍基地のある隣の町のカトリック幼稚園に、妹が通っていた。

わたしの両親はキリスト教を信仰していたわけではなかったが、妹と一緒に、日曜学校に2年間通った。

毎週日曜日になると、幼稚園のバスが迎えにきて、毎回聖書の中の一節と、絵が書かれたカードが配られ、先生のお話を聞いたり、讃美歌を歌ったりした。そのときのことはあまりよく覚えていないが、「神さまはいるんだな。」となんとなく納得していたような気がする。先生たちはいつも穏やかで優しかったし、クリスマスの劇の手伝いや時折催されるバザーなども愉しかった。

その後、引っ越しをしたこともあり、キリスト教からは表向きは離れた。だが、自分の中で、「神さま」というものの存在を、いつもなんとなく感じてきたような気がする。

それはだが、キリスト教の「神」とはまた違うものだったように思う。日曜学校で讃美歌を歌っていた時も、いつもその場にいるひとたちと一体になれないような、距離を感じていた。

大学院の修士課程のとき、ハワイに10日間ほどホームステイしたことがある。たまたま、大学の食堂で、旅行に来ていたハワイ大学の学生の女の子と友達になり、その子の家を訪ねて行ったのだ。彼女は日系アメリカ人で、彼女の家のすぐ近くに住んでいた彼女のおばあさんは、わたしと同じ福岡県出身の方だった。目の大きな、かわいらしい雰囲気の方だったことを覚えている。日本語はもうあまり覚えていないのよ、と言いながらゆっくりした英語で、ハワイに来た時のこと、息子のこと、孫のことなどを話してくれた。

ホストファミリーの父親と、神について討論したことがある。

きっかけが何であったかは忘れてしまったが、あるとき、「Yuki（わたしの本名）はなぜクリスチャンじゃないんだい？」というようなことを聞かれ、「わたしは神さまはいると思っているけれど、キリスト教の神とは違うと思っているんです。」と答えた。

「そんなに詳しく知っているわけではないけれど、キリスト教を否定するつもりはないんです。でも、仏教も、イスラム教も、ほかの宗教も、全て、どれが正しくてどれが間違いということではないと思う。わたしのいう『神さま』は、○○教とは名づけられないものなんです。」というようなことを話したと思う。

彼は、「真実はひとつだ。あれも、これも、というのは、間違いだ。Yukiの世界観は、キリスト教だよ。」と言い、「生きていくことは、ものすごい重荷（burden）なんだ。神

を信じれば、いつも、どこにいても、ひとりぼっちでも、ひとりじゃないとわかる。それは、生きていく重荷を軽くすることだ。人間は、ひとりだけでその重荷を背負えるほどには強くない。」とも言った。静かにわたしを見ながらそう言った彼の眼はまっすぐで、ゆるぎない信念が伝わってきた。だが、ただ、神を信じればいいのなら、なぜそれがキリスト教である必要があるのか、わたしにはわからなかった。議論は平行線のまま終わったが、彼の誠実さと優しさは人間として信頼できるように思えた。

もうひとつ、ホームステイ先で出逢った男の子が音楽について言っていた言葉が心に残っている。

彼は、人懐こい目をした優しい男の子で、学費を稼ぐため休学してアルバイトをしていた。みんなで集まって遊んでいるときに、よくギターの弾き語りで歌を聴かせてくれた。

「すごく歌がうまいのね。ギターはどこで習ったの？」と聞くと、彼は照れたような笑顔で、「自分で練習したんだ。」と言い、「僕はね、音楽は神さまからの贈りもの（gift）だと思うんだ。Yukiはそう思わない？」と言っていた。

音楽を演奏することは、こうありたいと思う理想の音と、現実の自分が出している音とのギャップにつねに向き合う作業でもあり、小さいころから、喜びというよりは、苦しみのほうが大きかった。なんのためにするのかわからない練習曲、きびしい先生、30分ものあいだ、ピアノの椅子にじっと座っていなければならないこと。そのどれもが苦痛だった。わたしはただ、普段自分が歌っている「シャボン玉」(6)とか、「ちょうちょ」(7)を、ピアノで弾ければそれで満足だったが、楽譜の音符の上に数字が書いてあり、その数字通りに指を動かさなければならなかった。いまならば、機械的な練習曲もたのしいと思えるかもしれないが、当時のわたしにとっては、苦行でしかなかった。

「神さまからの贈りもの」という言葉は、苦しんでいたわたしの心をすこしだけやわらかくしてくれた。彼の笑顔と言葉は、どこまでも続く青く大きな空、エメラルドグリーンの海、パイナップル畑、ダイヤモンドヘッドの頂上で気持ちのいい風に吹かれたこと、パスポートを失くして大騒ぎになったこと（翌日、無事に見つかった）、食事といえばファーストフードがほとんどで、野菜が食べたくてたまらなくなったことなどの思い出と一緒に焼きついている。

大学4回生の終わり、脚注も先行研究への言及もひとつもない「前代未聞」の卒業論文を書き上げてから、実家に帰ってほぼ寝たきりの状態になった。そのとき、たまたま妹が見ていた映画のビデオを一緒に観た。『天使にラブソングを2』(8)という映画だった。

映画のなかで、内気な男の子が“O Happy Day”という歌を歌う場面と、音楽を続けることを母親に反対され、悩んでいた女の子“His eye is on the sparrow”、“Joyful Joyful”という歌を歌う場面で、自分でも驚くぐらい、大粒の涙があとからあとから流れ落ちた。歌う人の内側から、生きる喜びのようなものがほとばしり出ていて、歌う人の魂の震えに自分の魂も共鳴して震えるようだった。わたしもこんなふうに歌いたいという想いが身体の奥底から突きあげてくるように感じた。とりわけ、“His eye is on the sparrow”という曲のなかの、“I sing, because I'm happy. I sing, because I'm free.”（わたしは歌う。しあわせだから。わたしは歌う。自由だから。）という一節は、この曲のなかで一番好きなフレーズである。「歌いたい」という想いは、「一生懸命生きたい」という想いと同じだったと思う。

“Joyful Joyful”という歌は、ベートーベン[9]の交響曲第九番第4楽章の旋律に、讃美歌の歌詞をつけたもので、おそらくメロディーは耳にしたことがある方が多いのではないかと思う。映画のなかの、躍動感あふれる歌と踊りを観ると、いつも力をもらえる気がする[10]。

## おらしょ

迷いながら修士課程に進学したわたしは、修士論文のテーマがみつからずに探していた。

卒業論文では、大正期の作文教育について書いたが、自分の書きたいことはこれではないという漠然とした違和感を感じ続けていた。「歌おらしょ」というものの存在を知ったのは、精神的なバランスを崩し、一年留年することを決めてから、テーマを見つけることを半ばあきらめかけていたときだった。竹井成美『南蛮音楽―その光と影』（音楽之友社、1998年）という本を読んでいて、中世にキリスト教が布教されたときに伝わった祈りや歌が、長崎県の生月島という島でいまもなお伝えられていることを知り、自分の耳で聴いてみたいと思った。九州の実家への帰省を利用して、両親に車で生月島に連れて行ってもらった。

「おらしょ」とは、ラテン語の「Oratio」に由来する言葉で、「おらしょ」として唱えられている祈りには、日本語のものも、ラテン語やポルトガル語のものもある。しかし、唱えている人々が、ラテン語やポルトガル語の意味を解して祈っているかといえば、そうではなく、音として暗誦しているといったほうが近いようだった。日本語の祈りにしても、意味を解して唱えるというよりは、呪文のように、音の連なりとして唱えているようだった。また、その音の連なりに、研究者が漢字をあてたことによって祈りそのものが変化している側面もあるようだった。

初めて「歌おらしょ」の存在を知った時、小さいころ日曜学校で歌っていた讃美歌のようなものを想像していたのだが、生月島で実際に耳にした祈りはそれとは程遠く、どちらかといえばお経に近いものだった[11]。何百年ものあいだ、弾圧に屈せず、祈りを伝えた人々の子孫の、西洋音楽的な「美しい」ハーモニーを勝手に期待していたわたしは、自分の都合のいい幻想を裏切られることになった。また、同じ生月島のおらしょであっても、集落によって内容も慣習も異なっており、「生月島のおらしょ」とひとくくりにされることにたいして、抵抗を感じている人が多いということも聞いた。

1873（明治6）年にキリスト教の禁教が解禁されても、弾圧下での信仰形態[12]を継承することを選んだ人々は、今日「カクレキリシタン」[13]と呼ばれている。

歴史の教科書で、キリシタンの弾圧については習ったことがあったが、それは江戸時代の話であって、とっくに過ぎ去った過去のことだと思っていた。現在もなお、当時の信仰形態を続けている人々がいることを知っただけでも驚きだったが、京都に戻ってきてほどなくして、ある先生から大阪府の高槻市の近くにもキリシタン関係の資料館[14]があることを教えていただき、ふたたび驚いた。「キリシタン」とは、長崎を中心とした九州での話だと思っていたのだ。

茨木市にある資料館に行ってみると、歴史の教科書や参考書でよく目にしていた、フランシスコ・ザビエルの肖像画が、1920（大正9）年、この茨木市の東氏の自宅で発見されたものだということがわかった。

茨木市千提寺に伝えられていたおらしょのなかに、以下のようなものがある。

> 「がらさみちみち、たんもにまるや様、御礼（おんれい）をなし賜（たまわ）る。おんなるす様御身と共に女人の中に於（お）いてましまして御果報（ごかほう）よみしきなり、またおんたんねんの尊（とうと）き御身にてまします。でうす様の御母様たまりを様、いまもわれらが最後に、われ悪人のためにでうす様を頼み給へ、あんみんじすまりを様」[15]

もともとのおらしょは、『ばうちずもの授けやう　おらしよの飜譯』という本の中で、以下のように記載されているのだが、比較してみると、すこし違いがあることがわかる。

> 「がらさみち〳〵玉ふまりやに御礼をなし奉る。御あ［る］じは御身とともにまします。女人のなかにをひてわきて御くはほういみしきなり。又御たいないの御［身］にてましますぜず［ゝ］はたつとくまします。デウス［の］御はゝさんたま

りや。いまも我等がさいごにも。われら悪人のため［に］たのみたまへあめん」(17)

「たまふ」という尊敬語が、「たんもにまるや様」に、また、「御あるじ」が「おんなるす様」に、「デウスの御母さんたまりや」が「でうす様の御母様たまりを様」に、「あめん(アーメン。祈りの言葉)」が「あんみんじすまりを様」となっている。

ここでわたしは、原文を「正統」であり、カクレキリシタンの人々が唱えていたものを「異端」だとするような、二分法をもちこみたいわけではない。重要なのは、このおらしょを始めとする祈りの言葉が、文書ではなく口承で伝えられていたという事実であり、これらの祈りは単なる音の連なりではなく、狭い意味での言葉の意味を越えた意味をともなっていたということである。その点で、外国語の歌に近いものがあるのではないかと思う。

修士論文を書いているとき、この祈りが、“Ave Maria（アヴェ・マリア）”で知られる歌の歌詞と同じだと偶然気がつき、驚いた。わたしにとっては、クリスマスのときによく聴くこの歌とおらしょとがつながり、“Ave Maria”という歌にいままでとは違う風景を見た瞬間だった。ラテン語の歌詞（祈りの言葉）は以下の通りである。

Ave Maria, gratia plena,
Dominus tecum,
benedicta tu in mulieribus,
et benedictus fructus ventris tui Jesus.
Sancta Maria mater Dei,
ora pro nobis peccatoribus,
nunc, et in hora mortis nostrae.
Amen

## 舟唄。そしてあたらしいはじまり

歌を歌うことは、必然的に歌と、自分自身にむきあう作業である。本当は、歌詞の内容だけでなく、旋律もまた、さまざまな背景をともなっているのだが、さしあたり、この歌詞を自分が歌うことはどのような意味を持つのだろうかと思わざるをえない歌に出逢うことがある。わたしにとっては、まずキリスト教の讃美歌と、ブルースや、ゴスペルといった、いわゆる「黒人音楽」と呼ばれる音楽だった。それらは、自分がクリスチャンではな

いということや、英語を日常語としているわけではなく、観客のほとんども英語を理解しているわけではないという理由によって、歌うことに躊躇や疑問を感じる音楽だった。

歌い始めたころはジャズのスタンダード[18]と呼ばれる歌を歌っていたが、歌い続けていくうちに、日本語の歌や、アニメソングなどもアレンジして歌うようになった。また、友人のミュージシャンが作った曲に歌詞をつけさせてもらい、初めて作詞をした。それは、うた――歌（うた）、詩（うた）――が自分のなかから生まれてくる過程でもあると同時に、出逢ったうたのなかにさまざまな物語を見出していく過程でもあったように思う。讃美歌に限らず、童謡にしても、アニメソングにしても、演歌にしても、それぞれの歌にはその歌が歌われた背景があり、物語がある。それらの物語をすこしずつ知っていくことは、誰かの物語に、自分の物語をそっと重ねるような作業であり、自分自身の織り込まれた世界を、もう一度見つめなおす作業でもある。

小さいころから感じていた、歌の中の「神さま」は、ひょっとしたら、ひとつひとつの歌、ひとりひとりのなかにある物語そのものだったのかもしれない。

航海日誌の最後に、ちいさな舟唄を記したいと思う。

うた

あるひとがいった
うたはいのりだと
またあるひとはいった
うたはうったえることだと

うた、歌、唄、詩、唱、ウタ・・・。

わたしはかんがえる
うたってなんだろう

こえをだして
メロディーにのせてことばをはっすること
それだけがうたなんだろうか

たとえば
だいすきなともだちにてがみをかいているとき
らくがきをしているとき
おいしいものをたべながら
だれかとおしゃべりしているとき
わたしはうたっている

うつくしいうたをきいて
おもわずなみだがながれたとき
こころのおくそこにある
ひみつのがっきがふるえて
かたおもいのひとをおもってひとしれずなくときのように
ひそやかなうたがつむがれるようだ

ゆうやけをみて
ことばをなくすとき
どこかのいえからただよってくる
カレーライスのにおいに
ちいさいころをおもいだすとき
こころのなかには
ことばにならないうたが
どんどんとふりつもっていくみたいだ

だからきっと
うたうことはいきることとおなじなんだろう
うたはわたしがいきているあかしなんだろう

注

（1）　姜信子『日韓音楽ノート―<越境>する旅人の歌を追って―』岩波新書、1998年、11頁、「序　あなたへの手紙」より。

（2）　姜信子、前掲、15頁。

（3）　姜信子、前掲、11頁。

（4）　Edward Kennedy Ellington（1899 - 1974）、ワシントンD.C.生まれ。ピアニスト、作曲家、バンドリーダー。通常、バンドの総譜（スコア）は、たとえば、トランペット1、サックス1というように、楽器名で記されているが、エリントン楽団のスコアでは、各ミュージシャンの名前が記されている。彼がミュージシャンの個性を重んじていたことがうかがえる。

（5）　たとえば、八分音符がふたつ並んでいた場合、通常なら同じ長さで二つの音を演奏するが、ジャズの演奏のときには、2：1の比率に近い長さで演奏することが多い。同じ長さで演奏する際は、“even（イーブン）”と呼んで区別する。

（6）　作詞：野口雨情、作曲：中山晋平。野口雨情が、生後七日で亡くなった長女を想って詞を書いたという説もある。

（7）　作詞：野村秋足。原曲は、スペイン、フランス、ドイツと諸説あり、はっきりと特定されていない。もともと尾張地方の民謡だった同曲を野村が採集し、歌詞を変えた。なお、同曲は戦前と戦後でも歌詞の改編が行われている。

（8）　原題“Sister Act 2: black in the habit”、1993年。主演；ウーピー・ゴールドバーグ（Whoopi Goldberg）、監督；ビル・デューク（Bill Duke）、制作：タッチストーン・ピクチャーズ（Touchstone pictures）。一作目の『天使にラブソングを（Sister Act）』は1992年、主演は同じくウーピー・ゴールドバーグ、監督はエミール・アドリーノ（Emile Ardolino）、制作はタッチストーンピクチャー。フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』（2010年6月8日取得）の『天使にラブソングを2』の項目によれば、ヒットした作品の続編をアフリカ系アメリカ人が監督したのはハリウッド史上初めてであるという。

（9）　Ludwig van Beethoven（1770-1827）、ドイツの作曲家。

（10）　映画の中には、アフリカ系の生徒と、白人の生徒との確執も描かれている。また、リタという名の女子生徒が母親に音楽の道を反対されていることも、彼女らが置かれている社会的な背景のなかで、アフリカ系アメリカ人が音楽で生計をたてることがどのような意味を持ったのかという観点からとらえる必要があると考える。

（11）　ここでいうお経とは、わたしがいままでに耳にしたことのある、浄土真宗の祈祷をさしている。

（12）　表向きは仏教徒のふりを装いながら、独自の暦を持ち、祈りの言葉を唱えていた。宣教師のないなかで、洗礼なども自分たちで行っていた。

（13）　カクレキリシタンの表記には、「隠れキリシタン」（古野清人『隠れキリシタン』至文堂、1966年）、「かくれキリシタン」（片岡弥吉『かくれキリシタン』日本放送出版協会、1967年）などがある。カクレキリシタン研究の先学者である田北耕也は、「潜伏キリシタン」と名付けている（田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、1954

年)。

宮崎賢太郎は、「現在のカクレキリシタンはもはや隠れてもいなければキリシタンでもない。日本の伝統的な宗教風土のなかで年月をかけて熟成され、土着の人々の生きた信仰生活のなかに完全に溶け込んだ、典型的な日本の民俗宗教のひとつである」(宮崎賢太郎『カクレキリシタン　オラショ―魂の通奏低音』長崎新聞新書、2001年、5頁)と述べ、「隠れ」という漢字に付与される、「幻想的にしてロマンチックなイメージ」を避けるべきであるとして、全てカタカナで表記することを提唱している。

(14) 茨木市立キリシタン遺物史料館。

(15) 『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』茨木市教育委員会、2001年3月、38頁。

(16) 林重雄　編『ばうちずもの授けやう　おらしよの飜譯』笠間書院、1981年。

(17) 「あへまりやのおらしょ」林重雄　編『ばうちずもの授けやう　おらしよの飜譯』笠間書院、1981年、124頁。原文において［　］などで記載されている箇所はそのまま引用した。

(18) ミュージカルや映画の中の曲や、ジャズミュージシャンが作曲した曲のなかで、よく知られ、演奏される曲を指す。